
春と秋

まるは

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春と秋

【Nコード】

N8880Y

【作者名】

まるは

【あらすじ】

怒りのために命を捨てようとした娘と、それを拾った男。男が彼女に教えてくれたのは「ぶつとばし方」だった。

大きな町の「外」で暮らす、二人の物語。

とりあえず、1章完結方式で2章くらいの長さの予定。気が向いた時に増えるかも、くらい。

千の秋 0

時は、仁大皇帝じんたいの御世。

東は東疎とうその地から、西は間奈留まなるの果てまでをひとつとした、大神おおか来むらという国があつた。

多くの戦乱を経て統一されたその国は、その頃の名残で各町は大きな壁で囲まれ、人々はその中で生活をしていた。

田畑までも内包する巨大な町は、外敵を完全に遮断し、長い籠城にも耐えられるように作られているため、よその町へ行く用がない限り出る必要はない。

一生を、町の中で終える者も数多くいる。

他の町へ行く時は、役所へその旨を申請し、許可証をもらわねばならない。

ならず者を、町の中に入れないようにするためである。

では、町の外に住んでいる者はいないのか。

答えは 「いる」、だ。

山や海での生活を生業とする者。

よその地から、移民してきた者。

町から、何らかの理由で許可証なしで出て行った者。

彼らは、「外」の人間として、厳密に「内」とは違う法体系の中に置かれることとなる。

これは、そんな町の「外」に住む者の物語。

千秋 1

「だめだ、だめだ！ 許可証を持たぬ者を、入れることは出来ん！」

ぬうと立つ門番二人は、千秋ちあきの前に立ちふさがっていた。

標準よりも小さい16歳の少女にすぎない彼女からすれば、彼らは鬼のように大きく恐ろしい者に見える。

しかし、通してもらえないからと言って、「はいそうですか」と、回れ右出来ない理由が、千秋にはあった。

「どうしても、内町うちまちのお役所に、申し上げたいことがあります。それさえ終わればすぐに出ますので、どうかお願いします！」

大男の背にそびえるのは、門。

その門の両側に広がる、高い高い石組の壁。

堅牢な壁で覆われた、守られた町。

千秋は、その中にどうしても入らなければならなかった。

粗末な着物を帯一本で縛りつけただけの、貧乏農民の末娘である彼女は、鼻緒のちぎれた草履を手に持ち、門番の頑なな心を何とか緩めようと必死に訴える。

対する門番は、この国の軍では一般的な、鑄造された量産型の兜と鎧を身につけている。防具だけでなく、槍まで持っている。

兜のてっぺんから伸びているひれは、色あせた緑色だ。

元々は鮮やかな緑で、西域を担当する軍の所属であることを表していた。

この町の治安を維持するために、中央から任を与えられた者たちだ。

彼らより身分の高い者からの命令、あるいは相当な額の賄賂でも積まない限り、彼らの心を動かすことは難しいだろう。

だが、その両方を持ち得ない千秋は、ただ懸命にお願いするしかないのだ。

「だめだと言っておるだろうが！」

すがりつこうとする千秋を、門番はいともたやすく跳ね飛ばした。

軽い彼女の身体は、まるで毬のように放り出され、地面にすっ転がる事になる。

身体のうちこちが痛むが、千秋はそれでも諦めきれない。

立ち上がり、門番にもう一度懇願しようとした時。

「これ以上、我々の手を煩わせると、本当に容赦しないぞ」

門番は、手に持った槍を構える素振りを見せた。

千秋は、さすがに躊躇した。

ここで、自分が死んでは誰が役所へ訴えるのか。

だが、引き下がっては、結局同じことになる。

千秋は、着物の袂たもとから、手紙を引っ張り出した。

彼女の父が書いたものだ。

役所に訴えたいことの仔細が、ここに記されている。

自分が入れなくとも、この手紙が届けば何とかなるかもしれない。

「では、これを役所の方に渡してもらえませんか？」

紙を手に入れるのも難しい中、何とか用意したものである。

しかし、門番二人は顔を見合わせ、嫌そうな表情を浮かべてみせるではないか。

「軍人を、タダ働きさせる気か？」

告げられた言葉は、堂々と賄賂を要求するものだった。

人はともかく手紙は入れてやらないでもないが、タダでは駄目だと言っているのだ。

千秋は、上に立つ者の中にひどい人間がいるのは知っていた。

下の者を虐げ、踏みつけることなど何とも思っていない人種だ。

だが、そんな人間ばかりではないと、心のどこかで思ってもいたのだ。

何故なら、幼少の時に過ごした町では、偉い人の中にもいい人がいたのを見て来たから。

だが、千秋の前に立ちふさがるこの軍人たちは、平民よりほんのちよつとだけしか偉くないにも関わらず、腐りきっている。

ギリと、奥歯を噛みしめて、彼女は怒りを喉元までせり上がらせた。

次に彼らが言うことを、千秋は知っている。

「まあ、そうだな。金がないって言うんなら……身体で払ってもいいぞ」

視線が、彼女の身体を舐めるように動いた。

痩せて、凹凸など皆無に等しい彼女の、こんな鳥ガラのような身体であっても、そんな目で見る事が出来るのだ。

ああ。

どこも、同じだった。

千秋は、手紙を握りしめて怒りにわななく。

喉元でとどめていた怒りが、いまにも唇から炎のように飛び出しそうになるのを感じながら、彼女は一步踏み出していた。

こんな世になんて。

「お金の代わりに、私の命を差し上げます……」

こんな世になんて　未練なんかない。

千秋は、門番に向かって駆け出した。

反射的に突き出される槍の先に。

彼女は。

飛び込んだ。

千秋の世界は、一瞬にして目まぐるしく変化した。

自分の身体が突然一回転し、鈍く激しい音と共に地面に落ちていたのだ。

地面に尻もちをついたまま、彼女はほけつとその光景を見ていた。

自分と槍の間に立つ、炭を背負った後ろ姿。

槍の穂先はへし折られ、千秋の足元に力なく落ちていく。

わなわなと震えている軍人たちを放置して、その人は千秋の方を振り返った。

「怒りは、そんな風に使うもんじゃないよね」

明るくあっけらかんとした声の、糸目の男がそこにはいた。

千の秋 2

「ありがとうございます」

千秋は、おそるおそる礼を言った。

山の中腹にある炭焼き小屋らしき粗末な家は、建てられている場所こそ違え、自分の家を彷彿とさせる。

煮炊きに使われるだろう囲炉裏に火が入れられると、疲れきった身体がほっとするのが分かる。

「お礼なら、もう何度も聞いたから、もういいよ」

桶の水を鍋に入れ、糸目の男はそれを囲炉裏へと吊るす。

門の前で大立ち回りをしでかしてしまった彼と千秋は、すぐさま門番に取り押さえられそうになり、慌てて逃げ出したのだ。

千秋が逃げたというよりは、この男に手を引つ張られ、付き合い合わせたと言った方がいいか。

いざ、町から離れてしまうと、千秋は途方に暮れてしまった。

目的を果たすことも出来ず、死ぬことも出来ず、不完全燃焼の怒りの行き先はどこにもなくて、本当に生きた屍のように突っ立ってしまったのである。

そんな千秋の頭に、糸目の男はぽんぽんと手を置いてくれた。

「とりあえず、僕の家に行こうか」

魂が抜けたままの彼女の手を、炭を背負った男が引っ張って行ってくれる。

きっと、彼は町へ炭を売りに来たのだろう。

町だけでは賄えない商品を売る者は、町に入る許可証を得ることが出来る。

おそらく、彼はそれを持っていたに違いない。

なのに、千秋の無謀な事に飛び込んできてしまったせいであんなことになり、しばらくは町への出入りは出来ないだろう。

とぼとぼ手を引かれて歩きながら、少しずつ正気に戻ってきた千秋は、目の前の男に申し訳ない思いでいっぱいになった。

「どうして……止めたんですか？」

助けてもらって余計なお世話と言いたくはなかったが、結果的には男にとっても千秋にとっても良い結果にはなっていないように思えた。

「言っただろう？ 怒りの使い方を間違えてるって……あそこで君が、怒りに任せて死んだって、ただの犬死にじゃないか」

握られた手に、少し力がこもった。

背はそれほど大きい訳ではないが、男の手は大きく、そして温かだ。

悪い人ではないのだろう。

いや、きつといい人だからこそ、無謀な千秋を身体を張って止めてくれたに違いない。

ただの犬死に。

それは、心のどこかで分かっていた。

自分の死など、あの軍人たちの心を動かす材料にはなりはしないのだ。

もう片方の手に握った父の手紙を、千秋はもつとぎゅっと握りしめた。

「10年くらい前から、外村^{そとむら}がたくさん作られ始めたんです」

千秋は、炭の背に向かって呟いていた。

彼の背は、俗世の人のように思えなかったのだ。

貧しい者も助けてくれる、聖人が菩薩の化身ではないかと。

「新しく土地を開墾して田畑に変える。開墾した者に土地は与えるということ、内町^{うちまち}に住んでいた次男坊の父は、喜んでその外村作りに参加しました」

千秋が、小さい頃の事だ。

内町に人が増えすぎ、食料の自給が困難になってきたため、国はその両方を同時に解消するべく政策を立てた。

内町の人手を外に出し、彼らに農地を作らせるという方法だ。

ただで土地が手に入る。

それは、跡を継がない次男以降の男たちの、心を動かすものがあったようだ。

家族を連れて彼らは外に出て、苦勞して苦勞して田畑を開墾し、そしてそこに作物を実らせるに至った。

だが、政策には無責任な部分があった。

国は、新たに開墾した田畑から、面積に応じての一定の税金を取り立てることのみにしか興味がなかったのだ。

新たに出来た外村の秩序や治安は、全て地方の権力者を村長むらおかしに据えて、彼らに任せたのである。

確かに、土地はそれぞれの者に与えられたが、同時に村長は重税も課した。

とても、家族が食べて行けないほどの税の重さだ。

外の村は壁に囲まれていないため、人々を守るために強い者を雇わなければならないという理屈で、国のものとは別に税を徴収した

せいである。

雇われた荒くれ者たちは、治安を守ると同時に、彼ら自身が治安を乱す種となり、ちよつとでも逆らう家があれば、ひどい目にあわされることとなった。

更に、農民の足元を見るかのように、こつ言い放つたのだ。

『税金が納められない者は、娘を納めよ。娘を納めた者は、向こう2年の税を減免してやろう』

農民たちは、怒り狂った。

反乱を企てた。

だが、彼らはそれを予見していたのか、『不穏な動きをしている輩について報告した者も、1年の税を減免してやる』とも言ったのである。

そのせいで、他の村人を売る者が出た。

元々、開墾のために集まった者たちであり、古くからの付き合いがあるわけではなく、一枚岩ではないところを狙われたのだ。

こうして、村は横のつながりも断たれ、誰も信じられない状態になっていき、ついには食うものに困って娘を差し出し始めたのだ。

こうなると、未来は暗く閉ざされたものとなる。

圧制を覆すことも出来ず、かといって、娘の数にも限りがある。

餓死者が出たり、逃亡者も出たりする。

耕す者のいなくなった土地には、また何も知らない内町の人間たちが、騙されて連れてこられるのだ。

横でつながれないのならばと、千秋の父は内町の役所へと窮状を訴える直談判の手紙を書いた。

それを、家にいる最後の娘に託したのだ。

最後の娘。

それは、もし一家が重税に押しつぶされそうになった時に、姉たちのようにあの家に差し出され、慰み者にならねばならないということ。

そうなる前に。

父の手紙を持って、千秋は走った。

一番近い内町まで丸一日、握り飯一つと川の水だけでようやくたどりついたのだ。

結果は、ひどいものだったが。

そして、死にそこなった千秋はいま、糸目の男と向かい合っている。

怒りの余り、この世を見限った彼女の前にいるのは、菩薩の化身

なのだろうか。

ゆっくりと鍋の湯が沸いていくのを、千秋は見るともなしに見ていた。

「思ったんだけどね」

毛先の跳ねたざんばら髪を、男は一度かきまわした。

声は、至って明朗だ。

千秋の村の不幸な窮状を聞いてなお、そんなものに振りまわされる様子などない。

そして。

「悪い奴は、ぶつとばしていいと思うよ」

あっけらかんと、とんでもないことを口にしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8880y/>

春と秋

2011年11月26日18時35分発行